



? 次の場面を探してみよう! 次の場面は、ア~アのどれに当たるか、()に記号を入れてみよう。

- ① 江戸から領地へ戻る武士の一行が、街道を歩いています。 ()
- ② 百姓たちが決められた量の米を、俵に詰めています。 ()
- ③ さまざまな工夫された農具を使って、稲を脱穀しています。 ()
- ④ 海岸の近くに、綿花の畑が広がっています。 ()
- ⑤ 百姓がお金を払って、新しいくわを買っています。 ()
- ⑥ 旅人が手にした案内書を見せて、道を聞いています。 ()

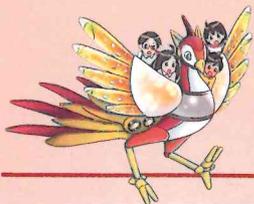
ヒント ①→p.125、140 ②→p.136 ③→p.138 ④→p.139、147 ⑤→p.138、147 ⑥→p.152

A

B

C





私たちは、江戸時代とよばれる長く続いた時代に
来ています。ここは、西日本の、ある街道沿いの農
村です。百姓の暮らしがうかがえる一方で、街
道にはさまざまな人々が行き交っています。



見方・
考え方

あづちもやま 江戸時代に
安土桃山時代から江戸時代に
移り変わって、どのような点が変わ
り変わっているのでしょうか。また、なぜそのよう
に変わったのでしょうか。例えば以下の点な
どに注目し、周りの人と話し合ってみましょう。

- ・街道を歩く人々の服装や持ち物
- ・場面アのように人々が使う農具



対話

街道が整備されて、現在でも見られる
まち並みができているね。街道を歩く
人々はどんな仕事をしているんだろう。



D

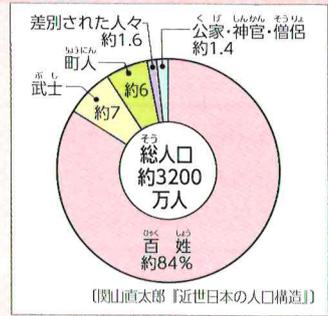
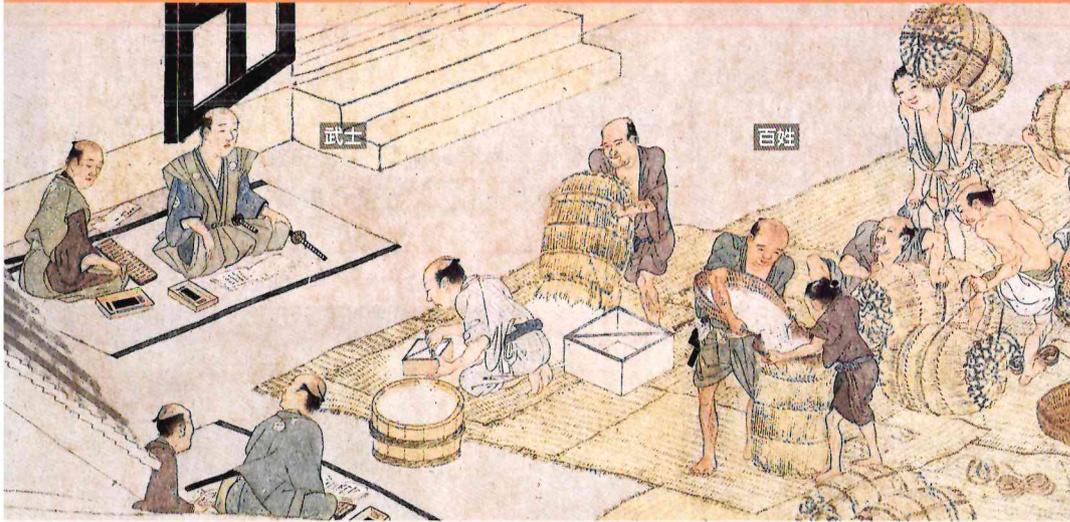
E

F





4節の問い なぜ江戸時代に産業や経済が発達したのだろうか。



↑2江戸時代の身分別人口構成 (幕末の推定値) **小地公**

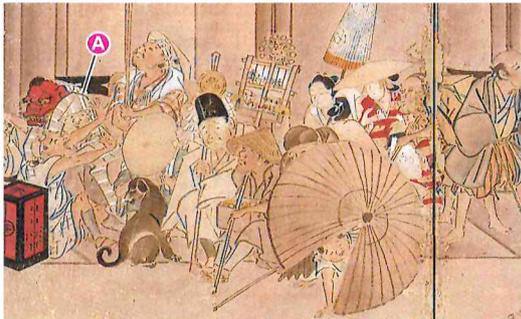
人口の少ない武士が、どうして力をもち続けることができたのかな。



↑1年貢を納める様子 年貢米は蔵に運ばれ、藩や幕府に納められます。絵は、百姓が年貢米を俵のなかからすべて出して、その量を四角の升で量り直しているところを描いています。蔵の前にいる二人の武士は年貢に不正がないよう確認しています。【丸山直太郎『七難七福図巻』京都府 相国寺所蔵/相国寺承天閣美術館 画像提供】

1 身分制の下での暮らし

学習課題 江戸時代の身分制とは、どのようなしくみなのだろうか。



↑3江戸時代のさまざまな人々 宗教者や芸能民といった、武士や百姓以外の身分の人々も、江戸時代を通じて存在しました。【英一蝶作『雨宿り図屏風』東京国立博物館蔵】

資料活用 図中のAはどのような職業の人物だろうか。

- ① 収穫した米の40%を年貢として納めさせる場合を四公六民、50%の場合を五公五民といます。
- ② 孔子(→p.20)の思想を学び、発展させた学問を儒学といいます。江戸時代には、教えがいくつかの流れに分かれていました。

身分制と武士 社会の安定を目指した幕府は、豊臣秀吉のときに行われた兵農分離をさらに進め、人々の住む場所を分けるなどして、18世紀までに、武士と百姓・町人の身分を区別するしくみを固めていきました。この過程で、百姓や町人に組み入れられなかった人々の一部は、差別されることになりました。

この身分制の下で、政治を行う支配者の身分とされた武士は、主君に仕え、軍事や行政に関わる義務を負いました。一方で、名字(姓)を名乗ることや、刀を差すこと(帯刀)などの特権をもちました。武士は幕府や藩の役職に就き、石高に応じて、幕府や藩から領地や米が支給されました。

百姓・町人 全人口の80%以上を占めたのは百姓で、大部分は村に住み農業を営む農民であり、自給自足に近い生活をしていました。農民は、農地をもつ本百姓と、農地をもたない水呑百姓などに分かれていました。村の有力者は、名主(庄屋)・組頭・百姓代など村方三役という役目に就き、村の自治にあたりました。農民に課せられた主な税は、収穫した米の40~50%の年貢で、村が責任をもって納めました。年貢は藩や幕府に納められ、武士の

近世の社会にも、中世と同じように、天変地異・死・犯罪など人間が計り知れないことを「けがれ」としておそれる傾向があり(→p.101)、それに関わった人々が差別されることがありました。もっとも、死に関わっていても、医師や僧侶、処刑役に従事した武士などは差別されなかったので、この差別には正当な理由がなく、支配者に都合よく利用された不当なものであるといえます。

差別された人々は、地域によってさまざまな呼び名や役割で存在していました。たとえよばれた人々は、死牛馬の取り扱いや皮革の製造、革細工、竹細工、草履や雪駄などの履物づくりのほか、犯罪者の捕縛や行刑役などに従事しました。ひにん とよばれた人々は、町や村の警備・芸能などに

従事しました。これらの人々は、社会的に必要とされる仕事や役割・文化を担っていたといえます。

なかには、経済的に豊かになる人も現れましたが、江戸時代中期から幕府や藩が出すお触れなどによって、百姓や町人とは別の身分として位置づけられ、服装や髪型を制限されました。このような政策で、差別はさらに強化されました。

[大阪人権博物館 (リナビティブおおさか)提供]



←4雪駄づくり 人々の生活に欠かさない雪駄も、差別された人々によってつくられました。竹の皮と牛や馬の革が使われたため水に強く、人々に重宝されました。

生活を支えました。幕府や藩は、安定して年貢を徴収できるように、村を通して農民に細かい指示を出したり、土地の売買を制限したりしました。さらに、五人組をつくり、互いに監視させて犯罪を防止したり、年貢の納入に連帯責任をとらせたりしました。また、百姓

は、藩などからの指示を理解したり、年貢などの計算や記録をしたりする必要性から「読み・書き・そろばん」も身につけていきました。

町人の身分は、商人と職人からなり、主に城下町に住みました。町人は、町内に土地や家をもつ一部の地主・家持と、それらをもたない多くの地借・店借などに分かれていました。地主・家持から選ばれた町役人が、町奉行の監督の下で町の自治を行いました。

文治政治への転換

17世紀後半になると、国内では幕藩体制が確立し、外国との関係も安定してきました。そこで5

代将軍徳川綱吉は、武力ではなく学問や礼節を重んじる政治(文治政治)への転換を明確にしました。綱吉は学問を奨励し、特に儒学の間でも、主君と家臣の主従関係や父子の上下関係を大切にする朱子学を重視して、文治政治の基本となる身分制の維持を目指しました。

朱子学の考え方は、大名と家臣の関係のほか、商人の主人と奉公人、職人の親方と弟子の関係にも広がりました。庶民の家でも、男の家長を主人とする「家制度」ができ上がり、財産や家業などを家長から長男一人が受け継ぐようになりました。また、男尊女卑の風潮が社会に根つき、特に女性は、小さいときは親に従い、結婚して夫に従い、老いて子(長男)に従うことが求められました。

徳川綱吉

1646~1709

文治政治に努めた将軍



綱吉は学問を奨励し、湯島(東京都)に孔子をまつる聖堂を建てて儒学を盛んにしたり、捨て子や老人へのいたわりを人々に求めたりするなど、戦乱の気風を改めることに努めました。また、800年ぶりの新たな曆(貞享曆)の制定(→p.145)、各地での寺院の建設などさまざまな政策に取り組みました。しかし、生類憐みの令で極端な動物愛護を定めたことなどから「犬公方(公方は將軍の意)」などと批判も受けました。アクティビティに挑戦 →p.156

歴史プラス 女性と学問

女性は『女大学』などの教科書で儒教思想や読み・書きを修めることで、自分の考えを表現する素養を身につけました。学んだ知識を用いて武士の家へ奉公に出て、経済的に自立する女性もいました。



確認しよう

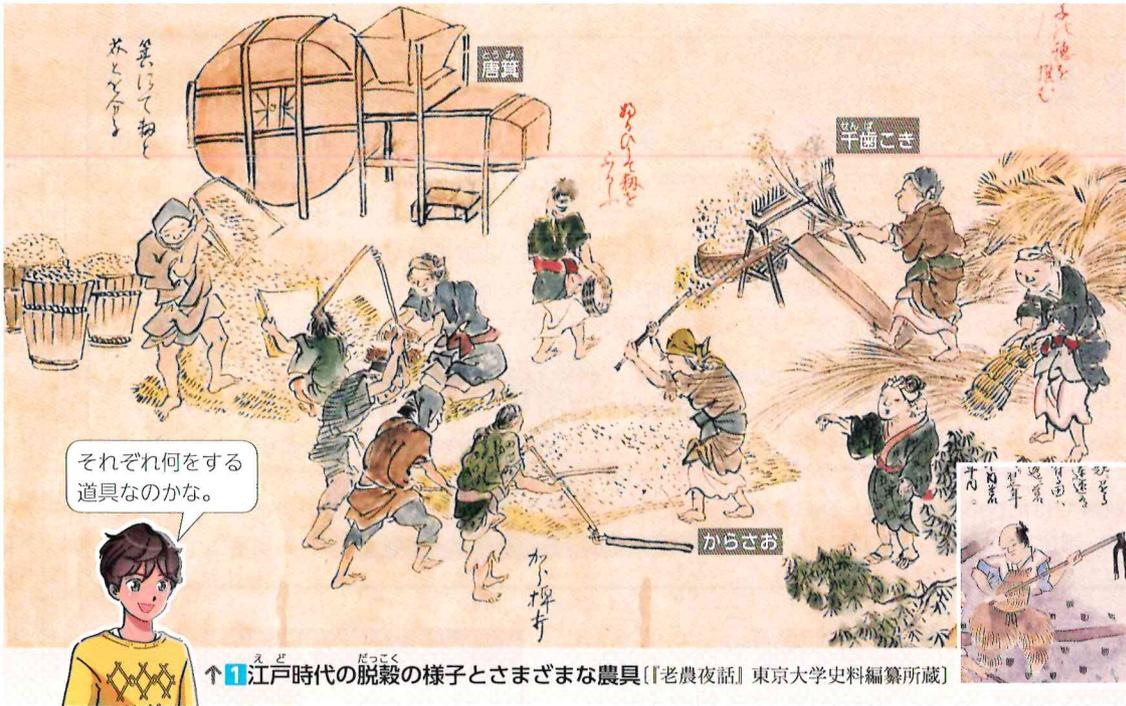
朱子学の考え方について説明している箇所を、本文から書き出そう。



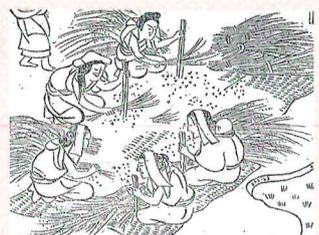
説明しよう

社会の安定化を図るため、江戸時代初めにどのような政策が行われたのか、説明しよう。

1	誕生
2	
3	
4	
5	古墳
6	
7	飛鳥
8	奈良
9	
10	平安
11	
12	
13	鎌倉
14	南北朝
15	室町
16	戦国
17	武士の山
18	江戸
19	明治
20	大正
21	昭和
22	平成
23	令和



↑1江戸時代の脱穀の様子とさまざまな農具【『老農夜話』東京大学史料編纂所蔵】



↑3千歯こぎが普及する前の脱穀の様子。2本の竹棒の間に穂先を挟んで、もみをこき落としていました。【『農業全書』国立国会図書館蔵】

資料活用 千歯こぎが普及する前と後で、農作業はどのように変わったのだろうか。

←2備中鋤 【『民家検分図』石川県立歴史博物館蔵】

2 安定する社会と諸産業の発達

4節の問い なぜ江戸時代に産業や経済が発達したのだろうか。

学習課題 江戸時代の国内産業は、どのように発達していったのだろうか。

新田開発と農業技術の発達 江戸幕府の支配の下、戦乱のない時代が訪れると、17～18世紀にかけて人口は急速に増加し、18世紀初めには、17世紀初めの約2倍にあたる3000万になったと推定されています。幕府や大名は、人口増加に対応するため、用水路をつくったり、干潟や沼地を干拓したりするなど**新田開発**に力を注いで米の生産量を増やすことに努めました。

一方、農民たちも、土地を深く耕することができる**備中鋤**や、楽に脱穀ができる**千歯こぎ**などの農具を使用し、**干鰯**や**油かす**などの、より栄養価の高い肥料も使うようになり、生産の効率が大きく上がりました。この時期に、農業技術を記した農書が**木版印刷**によって全国に広まったことも、こうした農業の新しい動きを後押ししました。この結果、耕地面積とともに米の生産量も飛躍的に増え、人々の生活はしだいに安定していきました。

特産物の生産 幕府や大名は、人口増加への対応として、米の増産以外にも、**貿易統制**によって輸入されなくなった**衣服**や**陶磁器**などの日用品の国内生産に取り組むようになりました。こうした動きは、中世以来の優れた技術をもっていた**畿内**(近畿地方)を中心に始まりました。そして、人々の生活が安定し、

未来に向けて 利根川のつけ替え工事 防災

江戸時代初期、利根川は荒川と合流して江戸湾に注ぎ、江戸やその周辺でたびたび洪水を起しました。洪水を防ぐため、幕府は大規模な工事を行い、利根川の流れを太平洋側に向けました。この工事で河川が整備されたことにより、利根川では船での運搬が活発になり、新田開発も進みました。



↑4利根川の流路の変遷 地図帳活用

① 干鰯は干したいわしで、油かすは菜種の油を搾ったあとのかすです。

歴史プラス もめん 木綿から広がる諸産業

加工や染色がしやすい木綿は、江戸時代に各地でつくられるようになりました。木綿の広がり、原材料である綿花や、木綿を染めるための藍、それらの肥料となる干鰯など、木綿の栽培から加工までに関係する産業の活性化と特産化にもつながりました。さらに、全国に広がったそれらの特産物を運ぶため、海運も活発になりました。

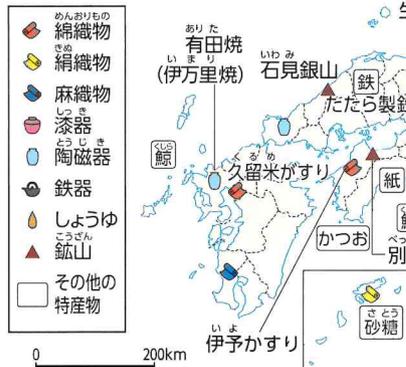
→ **5** 綿花 木綿は、綿花の白い繊維を加工してつくられます。




↑ **6** 全国の米の生産量の増加



← **7** いわし漁の様子
 わら縄に代わって、丈夫な麻糸で網がつけられ、大量のいわしを捕ることができました。
 [ポプラ社「県別歴史シリーズ12 千葉県」より、複写転載]



↑ **8** 各地の主な特産物 地図帳活用

需要が高まってくると、日用品の生産や加工を進める動きは各地に広がり、それぞれの風土に合った作物が**特産物**として生産され始めました。なかでも、木綿は庶民の衣料の中心となり、綿花の栽培が広がり、やがて、特産物の一部が領外へ売られるようになり、その後の商業発達の大きな原動力となっていました。

漁業・鉱業・林業の発達

漁業の技術も発達し、海産物も特産物として各地で取り引きされました。近畿地方の先進的な漁業技術が広まり、釣りだけでなく、改良が進んだ網による漁が各地で行われました。なかでも九十九里浜(千葉県)で取れたいわしは、肥料用に干鰯に加工され、各地で売られました。また、紀伊(和歌山県)や土佐(高知県)では捕鯨やかつお漁が行われました。海辺では塩も、赤穂(兵庫県)など瀬戸内で大規模に生産されました。

鉱業では、採掘や精錬技術が進歩したことで、佐渡金山(新潟県)・石見銀山(島根県)・生野銀山(兵庫県)などで開発が進みました。産出された金銀などは幕府の収入となり、そこから貨幣がつけられ、また重要な輸出品にもなりました。また、林業も人口の増加に伴い、建物の建築や燃料に使われる木材の需要が急速に高まったため、活発になりました。

未来に向けて 森林伐採と植林 環境・エネルギー

新田開発の進展と燃料需要の増加は、森林の減少という問題を引き起こしました。森林を失ったはげ山の様子は、浮世絵にも描かれています。森林の急激な伐採が行われた地域では、頻りに土砂災害が起こるようになりました。こうした状況を受け、幕府も対策に乗り出し、森林資源を守るため、植林を行うようになりました。



↑ **9** はげ山の様子 [「東海道五拾三次 日坂 佐夜ノ中山」東京国立博物館蔵]

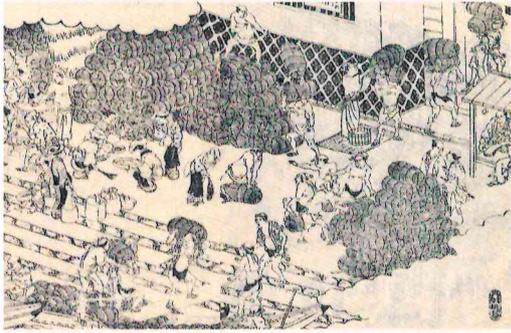
確認しよう 幕府・大名や農民が米の生産量を増やすために行ったことを、それぞれ本文から書き出そう。

説明しよう 国内産業の発達が社会に与えた影響はどのようなものだったか、説明しよう。

縄文
1 弥生
2
3
4
5 古墳
6
7 飛鳥
8 奈良
9
10 平安
11
12
13 鎌倉
14 南北朝
15 室町
16 戦国
17 江戸
18 江戸
19 明治
20 大正
21 昭和
平成
令和



↑1大阪の港のにぎわい[大阪城天守閣蔵]

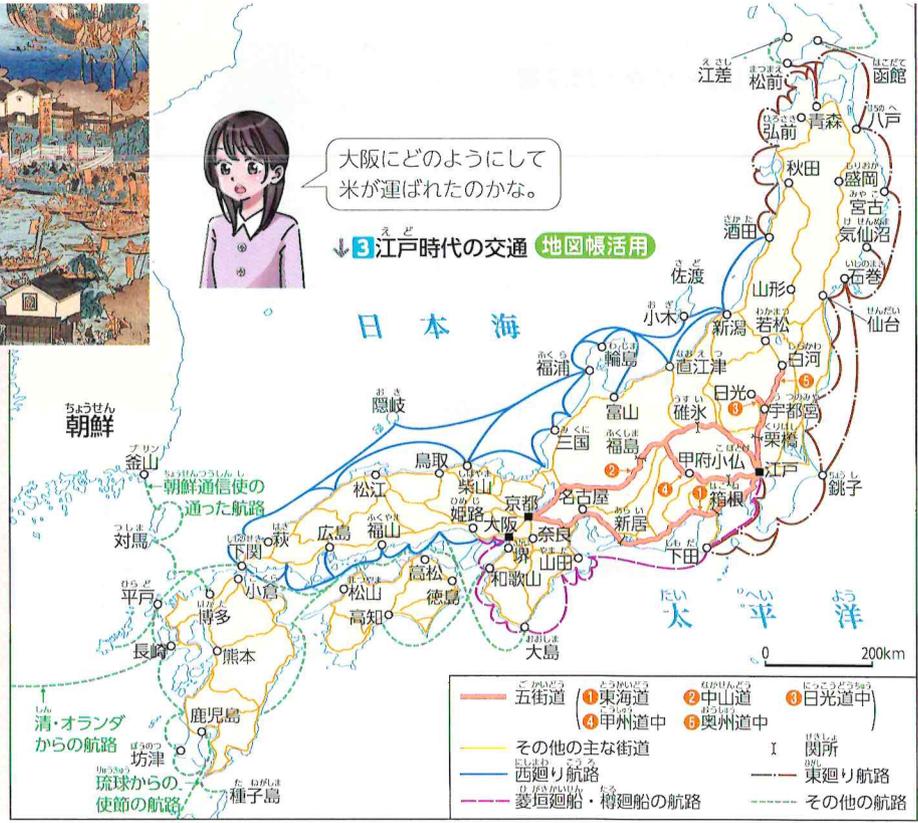


↑2大阪にある蔵に米を運ぶ様子[『摂津名所図会』東京都 国立公文書館蔵]



大阪にどのようにして米が運ばれたのかな。

↓3江戸時代の交通 地図帳活用



五街道 (1東海道 2中山道 3日光道中)	4甲州道中 5奥州道中
その他の主な街道	I 関所
西廻り航路	東廻り航路
菱垣廻船・樽廻船の航路	その他の航路

3 各地を結ぶ 陸の道・海の道

4節の問い なぜ江戸時代に産業や経済が発達したのだろうか。

交通網の整備は、産業や経済の発達にどのような影響を与えたのだろうか。

交通の整備

幕府は、18世紀初めごろまでに各地を結ぶ交通網を固めました。陸上交通では、大名が参勤交代をすることなどから、江戸の日本橋を起点に五街道が定められ、街道の途中には宿場が置かれました。地方の街道もしだいに整備されると、飛脚による通信も発達し、宿場町や門前町も発達しました。

水上交通では、全国各地で河川の改修が行われ、航路や港町も整備されました。東北地方の米などを、日本海沿岸・瀬戸内海を回って大阪へ運ぶ西廻り航路、太平洋沿岸を回って江戸へ運ぶ東廻り航路が開かれました。また、日用品が不足していた江戸へは、大阪から菱垣廻船や樽廻船で、菜種油・木綿・しょうゆ・酒などの品々が運ばれました。大量の物資を遠くへ安く輸送できることから、船での輸送は、ますます盛んになっていきました。

三都の発展

産業と交通の発達は、城下町などの各地の都市の成長を促しました。特に大きく発展した江戸・大阪・京都は、三都といわれました。

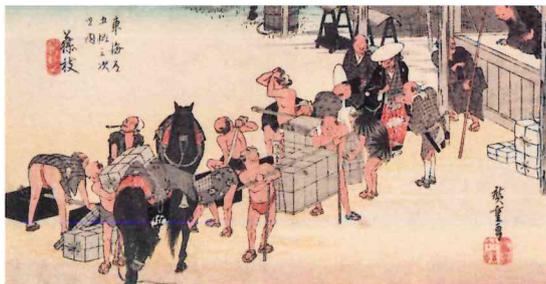
江戸は「将軍のおひざもと」といわれ、政治の中心でした。江戸の

地域史 日光東照宮と街道の発達

日光に徳川家康(→p.124)をまつる東照宮がつくられると、跡を継いだ将軍のほか、大名や一般の武士、庶民に至るまで多くの人が参詣するようになりました。そのため、江戸と日光を結ぶ日光道などの街道が整備されました。また、参詣者の増加に伴い、宿を提供する宿場町ができて、街道が急速に発達していきました。

↓4日光東照宮の陽明門(栃木県 日光市)





↑5 宿場の様子 遠くに荷物を運送するため、人と馬を宿場ごとに引き継いでいました。【『東海道五拾三次 藤枝』 栃木県 那珂川町馬頭広重美術館蔵】

資料活用 図5のなかから下に挙げたAとBを探してみよう。

- A. 馬から荷物を下ろす人
- B. 帳簿で荷物を確認する役人



→6 木綿問屋の株仲間の札 株仲間の札は、幕府や藩から与えられました。【人間文化研究機構 国文学研究資料館蔵】



↑7 越後屋の店内 従来の商売は訪問販売中心で、価格は相談で決め、まとめて後払いする方法でした。1673年に三井高利が江戸に開いた越後屋は、客が店を訪れ、織物の種類ごとの責任者から説明を受けて、定価をその場で支払う方法で、大いに繁盛しました。越後屋は、織物の直接仕入れも行い、両替店などの関係する業種へも手を広げていきました。【三井文庫蔵】

資料活用 「現金かけねなし」とはどのような意味か、調べてみよう。

住人の半分は、旗本・御家人と、参勤交代の大名とその家臣で、18世紀初めには人口約100万の世界有数の大都市になりました。

京都は、朝廷がある古代からの都で、文化の中心地としても栄えました。西陣織などの伝統的な高級織物や清水焼などのさまざまな

5 加工品や工芸品が数多くつくられ、各地方にも送られました。

大阪は、「天下の台所」といわれ、商業の中心でした。大阪には、諸藩の蔵屋敷が置かれ、全国から集められた大量の年貢米や特産物が運び込まれて、米や特産物の取り引きが行われました。

金融の発達と 商人の台頭

江戸時代の東日本では金の貨幣が、西日本では銀の貨幣が使われていたため、上方とよばれた大阪や京都から江戸への取り引きでは、大量の金銀の交換が行われました。

交通が整備されて商売が活発になったこともあり、貨幣の交換を行う両替商が現れ、金銀の交換や金銀と銭の交換、金貸し、為替の取り引きなどを行う金融業を営みました。大名のなかには、米や特産物の取り引きなどで大阪の両替商を頼って借金をする者もいたため、特に大阪で金融業が発達していきました。

商人は、同業者の組織(株仲間)をつくり、幕府や藩に税を納める代わりに、独占的に営業を行う特権を得て利益を上げました。産業の発達とともに、商人はしだいに富を蓄え、江戸の三井や大阪の鴻池などのように、経済面で武士を圧倒する商人も現れました。

① 諸藩は、年貢米や特産物を換金するため、日本最大の米市場がある大阪に蔵屋敷を設けました。物資が船で運ばれたことから、多くは、大阪の中之島や堂島など、河川に面する場所にありました。

歴史 プラス+ 江戸時代の貨幣

江戸幕府は全国統一の貨幣をつくり、流通させました。その貨幣は金・銀・銭の三貨で、金貨と銀貨は使う際に数を数えるのに対し、銀貨は重さを量りました。貨幣の使い方が異なることで、両替商などの金融業が発達しました。金貨は高額な貨幣であったため、庶民は銭貨や小粒の銀などをよく利用しました。

↓8 三貨 [左・中央：日本銀行貨幣博物館蔵]



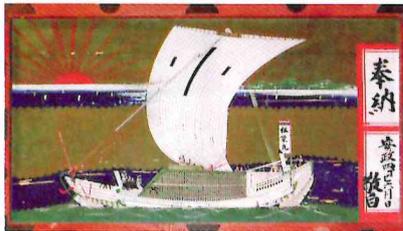
江戸時代の主な街道を五つ、主要な航路を三つ、本文や図3から書き出そう。

大阪が商業の中心として発達した理由を、交通網の整備に触れて説明しよう。

純文
BC
A3
1 弥生
2
3
4
5 古墳
6
7 飛鳥
8 奈良
9
10 平安
11
12
13 鎌倉
14 南北朝
15 室町
16 戦国
17 徳川幕府
18 江戸
19 明治
20 大正
21 昭和
平成
令和

1 昆布ロードのつながり

→1 絵馬に描かれた北前船
神社には航海の安全を祈願
して船絵馬が奉納されました。
〔富山県 岩瀬諏訪神社蔵〕



高田屋嘉兵衛

1769～1827

昆布ロードで
成功した淡路
の商人



淡路(兵庫県)の海運業者だった嘉兵衛は、頼まれた荷物を運ぶだけではなく、各地の物の値段や需要を見ながら自分の判断で兵庫の酒・塩・木綿、酒田(山形県)の米を仕入れて蝦夷地で売り、帰りには魚・昆布などを仕入れるなど、海運業者としても、商人としても成功を収めました。函館港を整備し、多くの漁場を開拓しました。また、日本に来たロシアとの交渉(→p.177)でも活躍しました。



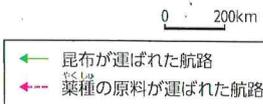
←2 アイヌが昆布をとる様子 良質な蝦夷地の昆布を、和人(→p.131)はこぞって求めました。
〔株式会社 十勝毎日新聞社蔵〕



←4 鯖寿司 鯖寿司は酢で締めた鯖を酢飯と合わせ、同じく酢で締めた昆布でくるんだ、関西の代表的な寿司の一つです。



←3 クーブイリチー 沖縄の伝統料理で、クーブ(昆布)の炒め物です。 (小地公)



↑5 昆布が運ばれたルート

1 北前船はどのような船だったのかな？

上方や瀬戸内地域では北陸地方に連なる日本海沿岸を「北前」といい、主に西廻り航路を通り、蝦夷地(北海道)と大阪を結んで物品を運んだ船を北前船とよびました。北前船の寄港地は、廻船問屋が軒を連ね、蝦夷地と本州を南北に結ぶ物流の拠点として栄えました。寄港地の富山では、行き帰りに積んだ荷を売買して、通常の船の何倍もの利益を上げたことから「バイ船」ともよばれました。

2 昆布ロードとはいったい何だったのかな？

北前船は、蝦夷地へ向かう際には米・縄・むしろ・酒な

どを、蝦夷地からの帰りにはにしん・昆布・鮭・ますなどの海産物やにしんを加工した肥料を運びました。さらに、長崎を経て清へ輸出する蝦夷地産の俵物や、琉球経由で清からもたらされる貴重な薬種(漢方薬の材料)なども運びました。

近年、蝦夷地から大阪・九州・琉球、そして清へと延びる海の道は、昆布が運ばれたことから「昆布ロード」とよばれるようになりました。北前船が寄港した地域には、富山の昆布おにぎりや昆布巻きかまぼこ、関西の鯖寿司や塩昆布、沖縄のクーブイリチーなど、独自の昆布食文化が生まれました。



疑問

関西や沖縄で、昆布は料理に欠かせない食材のようだけれど、多くは北海道でとられたものだそうだよ。どうして北海道から離れた地域でも、昆布を使った料理が食べられているのかな。

主な関連事項と関連ページ

清との貿易 p.128~129
西廻り航路 p.140 倭物 p.148
薩摩藩の改革 p.178

2 富山藩と昆布ロード



【株式会社広貫堂提供】

←6 富山の薬売り 薬売りは、得意先の情報が書かれた懸場帳などが入った柳行李を背負って、商売先へ向かいました。彼らは、得意先の家に薬を置いてもらい、再訪した際に使った分だけの薬代を集金する「先用後利」の商法で、販売網を広げていました。



←7 柳行李
【富山市売薬資料館蔵】



←8 中国や東南アジア産の薬種 薬種は腸の動きを整えたり、心臓を強くしたりする効果があるといわれる漢方薬の材料です。【富山県民会館分館金岡邸蔵】

じゃ香

黄連

→9 昆布のおにぎり 昆布の消費量が全国上位の富山では、昆布を使ったおにぎりなどが日常的に食べられています。



3 薩摩藩と昆布ロード



↑10 黒砂糖づくり 琉球や奄美群島では、黒砂糖づくりが盛んでした。江戸時代、砂糖は貴重品でとても人気がありました。薩摩藩は、この黒砂糖を納めさせ、昆布の交易に使用しました。【日本山海名物図会】福岡県 九州大学附属図書館蔵】

歴史プラス 中華料理を支えた海産物の輸出

昆布は、清の人々がかかりやすかった病気を予防するために必要な栄養素が高く、薬や料理の材料として利用されました。また、いりこ・干しあわび・ふかひれなどの乾物は倭物とよばれ、俵に詰めて輸出され、現在でも高級中華料理に使われています。



【岩手県立博物館提供】



干しあわび



いりこ
(干したなまこ)



ふかひれ
(さめのひれ)

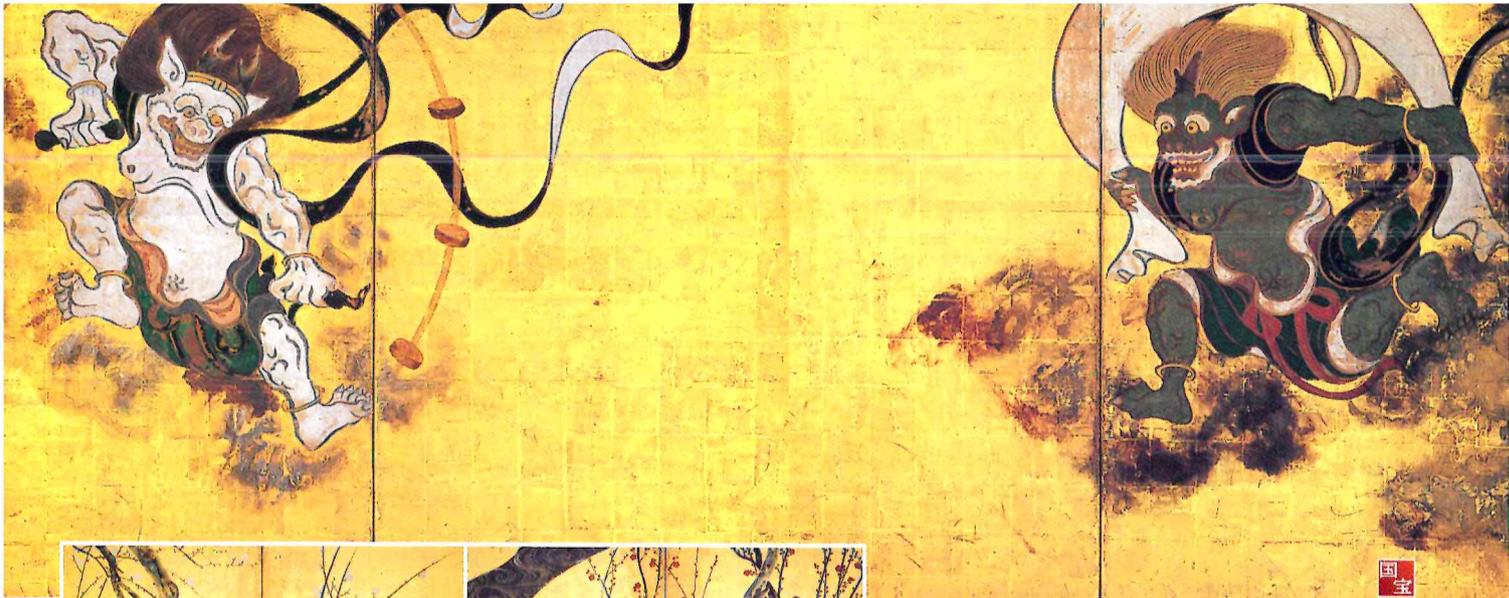
←10 倭物
【千葉県国立歴史民俗博物館蔵】

3 薩摩藩と富山藩はどのような関係があったのかな？

薩摩藩(鹿児島県)は奄美群島や琉球でとれる黒砂糖を日本国内に流通させて利益を得ていましたが、財政は悪化する一方でした。そこで、北前船で運ばれる昆布や倭物が清で人気であることに注目し、長崎や琉球を通して昆布や倭物を清に売ることによって借金を減らそうと考えました。そこで、以前より藩内に入出りをしていた富山の薬売りに昆布や倭物を運び込ませ、代わりに藩内での行商を許可し、清から輸入した薬種を富山に供給しました。

4 昆布ロードでどのような結びつきが生まれたのかな？

富山の薬売りが北前船で運んだ食材によって、日本各地や中国において、今なお受け継がれる食文化が生まれました。一方、薩摩藩が琉球を経て清から手に入れた貴重な薬種は、昆布の見返りとして富山の薬売りの手に渡りました。製薬業や昆布の食文化など、富山で独自の文化が発達した背景には、廻船問屋や薬売りによって築かれた日本海経由の交通路が、東アジアの交通網の一部となっていたことが関係しているのです。



↑ 1 依屋宗達作「風神雷神図屏風」[京都府 建仁寺藏 京都国立博物館提供 各縦154.5cm×横169.8cm]

← 2 尾形光琳作「紅白梅図屏風」[静岡県 熱海市 MOA美術館蔵 各縦156.0cm×横172.2cm]

二つの絵には、どのような共通点があるかな。



4 上方で栄えた町人の元禄文化

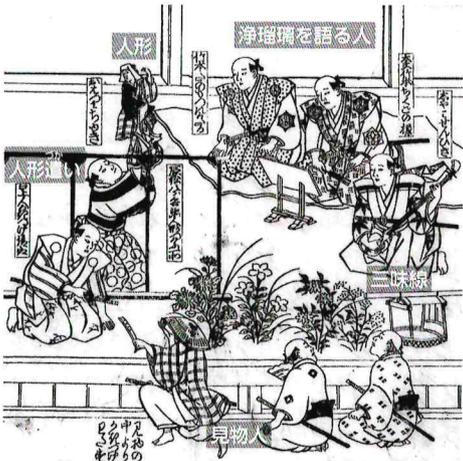
4節の問い なぜ江戸時代に産業や経済が発達したのだろうか。

江戸時代前半には、どのような特色をもった文化が展開したのだろうか。

町人が育てた元禄文化 戦乱の世が終わると、商業の発達と都市の繁栄によって、年貢などで生活を支える武士よりも、町人たちが経済的なゆとりをもつようになりました。17世紀末から18世紀初めにかけて、経済力や技術力をもつ上方の町人が生み出した文化を、当時の元号を踏まえて元禄文化といいます。

町人が社会の担い手となったことから、文学作品も町人の日常を描くようになりました。大阪の町人であった井原西鶴は、金銭や出世を追い求めて喜んだり悲しんだりする町人の姿を、浮世草子とよばれる小説に描きました。また、町人はその財力で、人形浄瑠璃や、この時期に踊りから演劇へと形を整えた歌舞伎を楽しむようになり、義理と人情の板ばさみになる男女の姿が描かれた近松門左衛門の台本は評判となりました。俳諧は、松尾芭蕉によって芸術性が高められ、町人や裕福な百姓の間で親しまれていきました。

また、「鎖国」によって、日本独自の文化が発展しました。江戸で



↑ 3 人形浄瑠璃 浄瑠璃(物語)・三味線・操り人形からなる人形浄瑠璃は、庶民に親しまれました。現代の文楽も、その一つです。[国立国会図書館蔵]

まつお ばしろう 松尾芭蕉 1644~94

はいかい げいじつてき 俳諧を芸術的に高めた俳人

『おくのほそ道』は、1702年に出版され、俳諧が広まるきっかけとなりました。この本は、1689(元禄2)年3月に松尾芭蕉が弟子を連れて江戸を出発、東北や北陸を回って大垣(岐阜県)に到着するまでの、5か月にわたる行程約2400kmの旅と、各地でよんだ句を記したものです。紀行文学の傑作といわれています。

→4『おくのほそ道』で芭蕉が旅した道とよんだ句
地図帳活用

- 1 行春や鳥啼魚の目八潮
- 2 夏草や兵共が夢の跡
- 3 閑さや岩にしみ入蟬の声
- 4 さみだれをあつめて早し最上川
- 5 荒海や佐渡によこたふ天河

【奈良県 天理大学附属 天理図書館蔵】

未来に向けて **日本人がつくった最初の暦** 情報・技術

日本では古代に導入した中国の暦を800年以上使い続けましたが、暦にくるいがでたことで、儀式や農業などでさまざまな問題が生じました。幕府は渋川春海に命じて、計算と天体の観測をなおし、日本独自の新しい暦(貞享暦)をつくらせました。改暦ができた背景には、和算の発達など、国内で科学が発展していたことがあります。

←5 渾天儀 天体観測で、星の位置を測定するために用いられました。中心の球は、地球を示しています。〔富山県 高岡市立博物館蔵〕

→6 尾形光琳作『八橋時絵螺鈿硯箱』 時絵は、表面に漆で絵や文様、文字などを描いた後、それが乾く前に金や銀などの粉を「時く」ことで色をつけています。〔東京国立博物館蔵〕

活躍した菱川師宣は、役者絵や美人画などで町人の姿を描いたことで、浮世絵の祖とよばれ、浮世絵は版画にもなりました。また江戸幕府の成立で、政治の中心が京都から江戸へ移ったため、京都では、文化に力を入れる動きが強まり、俵屋宗達や尾形光琳らが、屏風や時絵などに大和絵の伝統を生かした華麗な装飾画を描きました。

徳川綱吉による儒学の奨励は、ほかの学問の発展も促しました。なかでも日本独自の数学である和算では、関孝和が優れた研究を残しました。また、渋川春海が中国の古いかたちの暦を日本独自のものに修正したことで、月日を正しく確認できるようになりました。

現代に続く 年中行事と暮らし 正月や節句などの年中行事は、稲作に関する行事と、中国から伝わった行事とが影響し合って生まれました。18世紀になると農村では、ひな祭りや端午の節句のこいのぼり、盆踊りなどが日常生活に節目をつける行事として定着しました。また、一日二食の食事を、三食にした形が庶民にも広まりました。これらの生活様式は現代にも受け継がれています。さらに、菜種油などを使った行灯が照明として普及し、人々は遅くまで働いたり、遊んだりすることができるようになりました。



7 菱川師宣作『見返り美人図』 師宣が筆で描いた浮世絵です。華やかな着物を着た、町人の若い女性の姿を描いています。〔東京国立博物館蔵〕

この時期に庶民が親しんだものを、本文から二つ以上書き出そう。

確認しよう

なぜ上方の町人が文化の担い手となったのか、その理由を説明しよう。

説明しよう

縄文
1 弥生
2
3
4
5 古墳
6
7 飛鳥
8 奈良
9
10 平安
11
12
13 鎌倉
14 南北朝
15 室町
16 戦国
17 安土・徳川
18 江戸
19 明治
20 大正
21 昭和
平成
令和